

月刊教育ジャーナル 一九七四年七月号

# 教育随想

## 教育における

### “平等”の落穴



中嶋 嶺雄  
(東京外国語大学助教授)

教育にかんする論議がまた高まってきた。

教育とは古今東西、成人が幼体ないしは未成人にたいして知識や情報を伝達し、彼らの社会化と人格形成を育成するという人間行為なのであるから、こと教育にかんするかぎり、文部省対日教組、体制対反体制という図式ほどドグマチックで杜撰なものはないはずだが、とかく論議はこうした方向に流れがちのようだ。

もっとも、今日のようなギスギスした社会においては、教育は、その本来的なきびしさと牧歌性のゆえに、もともと人間的な行為であるという価値観そのものがつい揺いでしまうのである。

だが、そのような動揺は、ちょうど、アジアの国際環境を考えるときに、やれ米中接近だ、やれベトナム和平だ、というグローバルな枠組だけでついでアジアを考えてしまい、アジア諸国に共通なリージョナルな課題（たとえば当

面する各国の国民形成の問題）や、アジア社会の基底に存在するローカルなレベルの複雑な諸要因（民族、人種、種族、宗教、風俗、習慣など）を捨象してしまつて、きわめて観念的かつ図式的なアジア認識に陥つてしまう傾向と、どこか軌を一にするものである。



私自身もいま新学期を迎えようとしているが、今年も私のセミナール（国際関係論）の学生たちは就職を目ざして巣立っていった。

みなりっぱな卒業論文を提出していったことは、大学教師として一つの喜びだが、演習と卒業セミと二年間にわたって可能なかぎりの接触を保っていた学生たちであつても、人生の一つの選択肢に直面した学生たちから身の上相談を受けるときに感ずるギャップは、いまや敵いがたいものがあるような気がする。

最近も二つのショッキングな出来事があった。

その一つは、大学院への進学が、外



交官試験を目ざすかで迷っていた学生が、大学院へ進学したのち、自分がはたして教師にポストを得られるのか、と質問してきたことであった。

他の一つは、ジャーナリズムを志望してある通信社に就職の決まった学生が、将来、どうしたら社の幹部になれるのか、自分は編集局長ぐらいにはなれると思っっているが、と質問してきたことであった。

いずれも優秀で真面目な学生であるだけに、彼らが学生のうちから真剣な顔付きでこのような質問を私にぶつけてきたことに、私は啞然とし、言葉がなかったことはいうまでもない。寂しさと空しさに胸がつまる思いでもあった。

そこには、学問への情熱、ベンに生きようとする者の気概よりも、社会を生きるための効率がまず支配していることを知らされたが、いままらこんなことで驚くのは私のほうが、どうも野暮であるらしい。

入試とは、人生でほとんど唯一の平等な試験の機会であるのに、その入試の弊習のみを強調するマスコミが、合格者の学校別ランキングを年々ますます派手にきそって報道しあうという倒錯した今日の風潮のなかで、他方では、教育の機会均等とか平等とかが流行語のように唱えられ、学校群制度が次

次に導入され、小・中学校の運動会の賞品は一等も五等も参加賞として同じという誤った「平等」観がまんえんすればするほど、若者たちは、人生に効率だけを見出そうとするのではなかる

## 人間関係

### といわれるもの



三石 巖  
(科学評論家)

私の教え子が最近オーストラリアのシドニーへ赴任した。もともとその人は女性だから、夫君についていっただけのことである。

彼女からの手紙に、日本にきている外国人は気の毒だであった。あちらの人たちの心暖まる接し方と比較して、日本人の外国人に対する接し方があまりにもつめたいという意味なのだ。

彼女が居をかまえたとなんに隣家の細君があらわれた。どんなお役にも立ちたいと、旧知の人に對するかのように。しかもそのオーストラリア人は、脳生理学の本で、夢のことを勉強している。その話題をひっさげて訪ねてくるのだ。

教え子のほうは英語はゼロに近い。そのゼロを知りつつ隣人は人間として

うか。

教育の理念とは、そのような誤った「平等」観に基づくと薄っぺらな「参加の思想」などでは決してない、と私は考えている。

肉迫する。どちらも三十歳前の若い女性だからそんな気易いことが可能という見方もありうるかもしれないが、そうともかぎらないだろう。

人間関係ということばがあつて、われわれはむしろ日常的にこれを使っている。私は最近、このことばの中身を掘りさげることを行っているのだが、このオーストラリア美談はそこに一つの資料を提供する形となった。結論からいってしまえば、われわれ日本人は真の人間関係を知らないのではないかということだ。

相手を人間としてみないかぎり、真の人間関係などありようがあるまい。われわれ日本人は、相手を人間としてみない傾向がありはしまいか。運タクシーに乗れば運転手がいる。運